

## 神様の変心？

[エゼキエル書 33 章 10～20 節]

「人の子よ、イスラエルの人に言いなさい。お前たちはこう言っている。『我々の背きと過ちは我々の上であり、我々はやせ衰える。どうして生きることができようか』と。彼らに言いなさい。わたしは生きている、と主なる神は言われる。わたしは悪人が死ぬのを喜ばない。むしろ、悪人がその道から立ち帰って生きるとを喜ぶ。立ち帰れ、立ち帰れ、お前たちの悪しき道から。イスラエルの人よ、どうしてお前たちは死んでよいだろうか。

人の子よ、あなたの同胞に言いなさい。正しい人の正しさも、彼が背くときには、自分を救うことができない。また、悪人の悪も、彼がその悪から立ち帰るときには、自分をつまずかせることはない。正しい人でも、過ちを犯すときには、その正しさによって生きることができない。正しい人に向かって、わたしが、『お前は必ず生きる』と言ったとしても、もし彼が自分自身の正しさに頼って不正を行うなら、彼のすべての正しさは思い起こされることがなく、彼の行う不正のゆえに彼は死ぬ。また、悪人に向かって、わたしが、『お前は必ず死ぬ』と言ったとしても、もし彼がその過ちから立ち帰って正義と恵みの業を行うなら、すなわち、その悪人が質物を返し、奪ったものを償い、命の掟に従って歩き、不正を行わないなら、彼は必ず生きる。死ぬことはない。彼の犯したすべての過ちは思い起こされず、正義と恵みの業を行った者は必ず生きる。それなのに、あなたの同胞は言っている。『主の道は正しくない』と。しかし正しくないのは彼らの道である。正しい人でも、正しさから離れて不正を行うなら、その不正のゆえに彼は死ぬ。また、悪人でも、悪から離れて正義と恵みの業を行うなら、それゆえに彼は生きる。それなのに、お前たちは言っている。『主の道は正しくない』と。イスラエルの人よ、わたしは人をそれぞれの道に従って裁く。」

### [1] 旧約聖書と私たち

今日はまたエゼキエル書から聞いてゆきたいと思います。旧約聖書です。今からはるか昔と言って良い、紀元前 600 年頃の話です。普通に私たちは思うと思います。何故そんな 2600 年も前の話が、今の私たちと関わりがあるのですか、しかも外国の話ではないのですか、と。

けれども、これまでの歴史の中で、キリスト教徒たちは、ここに記されている神様とは、ただお一人の神様のことであり、ただお一人の神であるがゆえに国や民族、また時代を超えて語りかけているのだと捉え、読むことができました。そして、

読めば読むほど、ここ（旧約聖書）には神様と人間の関わりの原点があり、今、この私に個人的にも語りかけている神様の招きというものがあるということが示されてくるのですね。

少しだけこの当時の歴史的なことを見てみますと、時は、イスラエルの南王国のユダが、バビロン捕囚という亡国の憂き目に遭っていた頃です。今日 33 章の所では、バビロンに捕え移されていた預言者エゼキエルの所に、一人の者が、実は都エルサレムが陥落してしまったという伝言を伝えるのですね。21 節にこうあります。—「我々の捕囚の第十二年十月五日に、エルサレムから逃れた者がわたしのもとに来て言った。「都は陥落した」と。エルサレムには彼らの精神的拠り所であった神殿がありました。今捕われの身であっても、神殿がなおその場所にあることは大きな望みだったと思います。それが陥落したという知らせです。その失望は大きかったと思います。

しかも、エゼキエル自身のことを見てみても、この三年ほど前に、彼は**自分の妻を亡くしている**のですね。24 章 15 節以下にそのことが記されています。これは彼にとって、不条理な出来事であったと思います。彼も神様の働きを担う神殿に仕える祭司の一人でありました。その彼を主が預言者として任命したのですね。不条理や辛いと思えることを抱えながらも、彼自身もきっと神様に問いながら、また自分のイスラエルの民に、神様の言葉を告げたのだと思います。預言者自身が苦しむ。でも、きっとそこでこそ見せてもらえるものがあるのだと思います。

## [2] 神様は変心された？

旧約聖書を読んでいく時に私たちは時々思わないでしょうか？「何て厳しい神様なのだろう」と。そして「私たちは新約聖書の時代の優しいイエス様を信じることが出来るから良かった」と思うことがあるかも知れません。…でも、それでは、神様は、時代の中で変心（心を変えること）をしたのでしょうか？優しい神様が変わっていったのでしょうか？

「旧約聖書」、「新約聖書」と言いますが、その「約」とは、翻訳の「訳」ではなく、**契約の「約」**です。聖書が語る「信仰」というのは、**神と人間の「契約」**であるということを改めて思い起こしました。信仰は、ただ心の持ちようということ以上の事だと思えます。思えば結婚もそうですし、家を買う時でも契約を交わします。その契約というものは、基本はその関係が**他から壊されず、保たれ、守られる**ためにある約束ですよね。聖書の語る信仰というのも、そうなのですね。神様は**ご人格をお持ち**なのです。（それがもっとも明確にあらわされたのが**イエス・キリス**

トというご人格ですね)。神様が、まずイスラエルの民と「契約」を結んで下さったのです。まず、あちらからです。それを、人間の側が勝手に破ってしまった。他の神々（偶像）に心惹かれていってしまった。と言うよりも、本質的には**自身や自分の思いを神様にしてしまった**。「もう神などいない」と思い、生きるようになり、そして今、そのイスラエルという信仰共同体が崩壊寸前になっている所なのです。契約を壊したのは人間の方なのです。けれども、そこで神様は、「人の子よ」と言って、**エゼキエル**を立て、ご自分の言葉（意志）を伝えるのですね。言葉を伝える。これは、まだコミュニケーションがある、ということです。完全無視ならそれすらありませんよね。

12 節にこういう言葉がありました。「人の子よ、あなたの同胞に言いなさい。正しい人の正しさも、彼が背くときには、自分を救うことができない。」いくら人間の目からは正しそうに見えたとしても、神様は、ご自分に繋がっているかどうかを見ます。もしその人が神様がいないかのように生きているなら、坂道を転げ落ちるように救うことが出来ない、と言うのですね。けれども、この 12 節の後半はとても大きな神様の憐みがあると思えました。こうあります。「また、悪人の悪も、彼がその悪から立ち帰るときには、自分をつまずかせることはない」。凄いですよね。神様の救いと言うのは、人間の善悪というものを**も超えている**のですよね。ふつうの人間同士の間であれば、人間の善悪、道徳というものが判断に基準になるでしょう。でも**信仰の基準**というものは、まず、何よりも**神様との契約関係**です。神様とつながっているかどうか。そして、たとえ離れてしまったとしても「立ち帰る時には」、それを妨げるものは何もない、と言っているのですね。

その内容がまとまっているのが、10～11 節の言葉です。

「人の子よ、イスラエルの家に言いなさい。お前たちはこう言っている。『我々の背きと過ちは我々の上であり、我々はやせ衰える。どうして生きることができようか』と。彼らに言いなさい。わたしは生きている、と主なる神は言われる。わたしは悪人が死ぬのを喜ばない。むしろ、悪人がその道から立ち帰って生きるとを喜ぶ。立ち帰れ、立ち帰れ、お前たちの悪しき道から。イスラエルの家よ、どうしてお前たちは死んでよいだろうか。」

神様は変心(?)したのでしょうか?神様の目に「悪人」とさえ言われているイスラエルの民であり、私たちなのです。「悪」だ、と言われているのですね。でもその悪人が死ぬことを喜ばない、と言うのです。筋が通っていないじゃないか、と言いたくもなるのでしょうか。…そうです、筋が通っていないと言えば通っていないのです。けれども「変心」ではないと私は思います。神様がある意味頑固にご自分の顔を守ろうとするならば、悪人は断罪されて終わりでしょう。でも神様

は、ご自分の顔を守ろうと頑固を通す、というのではなく、どんなに罪を犯そう  
が、神様を無視しようが、一番大事にされたのは「人間」なのだと思います。人間  
はご自分の愛の対象だからです！「神はご自分のかたちに人を創造された」(創世  
記 1:27)のです。その人間に対する愛、憐みは変わらないのではないのでしょうか？

### [3] ただ私たちへの愛がある

週報にも紹介したのですけれども、岩本遠億(えのく)牧師の言葉にこのよう  
にありました。(『366日 元気の出る聖書のことば』より)

「**愚か者は心の中で『神はいない』と言う**」(詩編 14:1)。心の中で「神はい  
ない」と言うとは、自分を基準とするということです。自分を基準として物事を  
判断し、他を裁く。自分という世界の中で自分が王様になることです。どんなに  
口で「神はいる」と宣言しても、自分を基準としている時、心の中では「神はい  
ない」と言っているのと同じではないでしょうか。

「**神はいない**」の反対は、「**神はいる**」ではありません。「**神はいない**」の反対  
は、「**神様!**」と呼びかけることです。」

本当に、そうではないのでしょうか。そして、本当に私たちが神様の所に帰って  
行けるために、神様は私たちに御子イエス・キリストを送って下さったのですね。

「**愚か者は心の中で『神はいない』と言う。彼らは腐っている**」というのが、詩編 14  
編の言葉です。私たちは自分を王様にすることによって腐っていくのです。食べ  
物も放っておくと腐りますね。神様は私たちの命、光、また清き泉です。そこに立  
ち帰るならば腐敗が防げるのではないのでしょうか。私たちにとってはイエス様  
です。私たちの「罪」という悪臭を、全部イエス様ご自身が引き受けて下さいま  
した。命を投げ出して下さいました！神様の面子(メンツ)も何もあったもので  
はありません。あるのは、ただ私たちへの愛です！

岩本牧師の本の中にはこのような言葉もありました。—「**罪を指摘するのは簡  
単です。しかし、指摘された人の心は、固く閉ざされ、死んでしまいます。(真  
の)愛は正しさを主張しない。愛は人の罪を覆い、自らは死んでゆくのです。こ  
のような愛を人は知りませんでした。しかしイエス・キリストは自分の正しさを  
主張せず、自ら十字架にかかって、私たちの罪をその身に負われたのです**」。

—「**どうしてお前たちは死んでよいだろうか**」。エゼキエルに告げられた主の言葉  
は、イエス・キリストの十字架となりました。ここに、**神様の不変の愛**があるの  
ですね。それを知った者は、「神はいない」などということが最早出来ません。  
私たちの心の中には、今、神様を賛美する心が与えられているのです。心から感  
謝して、主を呼びながらこの人生を歩んで行きましょう。

お祈りを致します。